

# 第1章 戦場

## 中国での戦い 兵隊と捕虜としての五年間

かわいすみはる  
川井澄晴さんのお話から

私の軍隊生活は二年間で、捕虜生活が三年間と、捕虜になってからの方が長いのです。入隊してから捕虜になるまで、訓練等の兵隊の経験はしていますが、実際に鉄砲を撃ったこともないし、撃たれたこともありません。

私は、旧制中学校の時から兵隊になる訓練を受けていました。私は和寒から旭川中学校まで汽車で通っていました。旭川には第七師団があり、中学校には兵隊さんが号令を教えに来ていました。最初は少佐が来られましたが、そのうち段々と位が下がってきて、最後は私たちがあだ名で呼べるような方になっていました。号令のあとは訓練をして、銃声が打ち響いたりしました。

中学校を卒業してからは、鉄道省に入り、千葉に派遣されて土木関係の仕事をしました。線路の枕木から下の部分を担当し、橋やトンネルも作っていました。また、設計をして石炭を掘るなどいろいろな仕事をやっておりました。

私が軍隊に入ったのは昭和十八（一九四三）年です。昭和十八年に入隊するのは、現役としては最後の方でした。召集された私たちは、大阪に集まって、朝鮮を通って「満州」（中国東北部）に向かい、「満州」で入隊しました。昭和十八年一月十九日に大阪に着いて、大阪から船に乗り、さらに列車に乗って「満州」に行つたのです。そのとき一緒に行つたのは、中隊だけでも百七十人くらいいましたが、今、生きているのは私の同年兵では三人だけです。あとはみんな亡くなりました。

「満州国」というのは日本が作った国で、北朝鮮の北の方にあり、日本よりも黄金国時代だと当時は言っていました。ところが、向こうへ着いたのは一月の二十何日ですから、とにかく寒くてぶ

○鉄道省 国有鉄道（国鉄）の経営や私鉄、陸運（トラック輸送）を監督した官庁。国鉄には現場系と事務系職員がいた。

○輜重兵 軍需品の輸送・補給にあたる兵。

○東安省斐徳（現黒竜江省鶏西市密山市斐徳）昭和十四（一九三九）年日本が牡丹江省の一部を分割して東安省と呼んだ。日本の関東軍部隊が配置されていた。

るぶる震えるほどでした。まだ、防寒服が支給されないもので、寒くてどうしようかと思いました。私は目が悪いものですから、兵隊検査で輜重兵だと言われました。うちの父親が「輜重兵は馬を扱うので大変だぞ」と言い、馬など触ったこともなかったのです。父の知り合いの農家に頼んで、二、三回は馬を見に行きました。なにしろごつい体をしているので、恐ろしくて触れるものではなかったですね。

軍隊に入ってすぐに次のような仕事もさせられました。「満州」とソ連の中間に、たくさん川があります。地図の等高線から平地の高さを調べて、それから川の水面の高さを測り、川底の位置も等高線である程度確認するというものです。こうした任務を一年以上やっておりました。

私はあまり目が良くなかったのですが、入隊後に、「満州」の東安省斐徳で、なんと自動車隊に入りました。自動車隊に行く兵隊は、タクシーの運転手とかトラックの運転手とか、みんなすごいので



トラックを引っ張る日本兵

イメージ図

す。私は自動車に乗ったことなどありませんでしたので、これはたまらんなあと思いました。私より後から入ってきた人は、私よりもずっと年上で、中には父親ぐらいの人も大勢いました。また、志願兵といって、十六歳になると志願して軍隊に入れるのですけれど、そういう人も同期にいました。

自動車で何を運ぶかというとき、米などの日ごろ食べるものです。私の班は車の扱いに慣れないので、自動車を押してしまうことが何回もありました。ところが月日が経つと、間違いではなく、ガソリンを使わないで、自動車すべてにロープをつけて引っ張ることになりました。もうこうなったら終わりだなあと考えたのですが、言える訳もありません。ですから、我慢して周りに合わせていました。

そのような時に、ソ連兵が国境を越えて

「満州」を攻撃してきたのですから強烈です。日本が負けても仕方ないくらいです。ソ連は機関銃をばばーんと撃つのですが、日本は機関銃などなくて、持っているのは拳銃だけでした。槍



イメージ図

機関銃を撃つソ連軍

よりは鉄砲のほうがまだいいかなと思ったりしました。私も死にたくはなかったです。

そして私は北朝鮮に連れて行かれました。その時のソ連の兵隊は十六から十七、八歳の男の子で、みんなぼろぼろの服を着ていました。北朝鮮に着くと、ソ連兵はテントを張ったのですが、雨が降っていたので水が入ってしまいました。

北朝鮮では、私たちは八畳間ほどのところに二十五人くらいがいました。畳一畳分に対して三人分ですから、寝たらどうしようもなく、耐えられませんでした。そういう生活もしました。

そこから汽車でシベリアを横断して、ウクライナの方、黒海こっかいの方に連れて行かれました。二十二日間かかりましたが、その間はひえや粟あわなどを食べていました。そこで私たちは捕虜ほりよになったのです。ウクライナでは市民につばをかけられたり、足で蹴こつ飛ばされたりしました。

私は、昼間は寝て、夜起きていることになりました。そうすると、難しい仕事も計算もできなくなるのです。怒られたり、ばかにされたりして、小さいときから学校に行っていたのにと悔しい思いをしました。

そして、食事は黒パンでした。その他におかゆを食べていました。あとはじゃが芋いもですね。すっかり飽きてしまつて、私は日本に帰ってから、一、二年くらいは芋を食べられませんでした。私の中隊の仲間は、戦場で大勢戦死し、捕虜になつてからも、生死の境をさまよいました。食べ物はありませんでしたが、おいしいものは何もありませんでした。戦争をして、何もいいことはありませんでしたね。

**DATA**

平成23年度東区平和事業  
聞き取り

- ・平成23年9月7日
- ・北園小学校



**川井澄晴(かわい・すみはる)さん**

- ・大正11(1922)年生まれ
- ・札幌市東区在住